



暮らしの風景

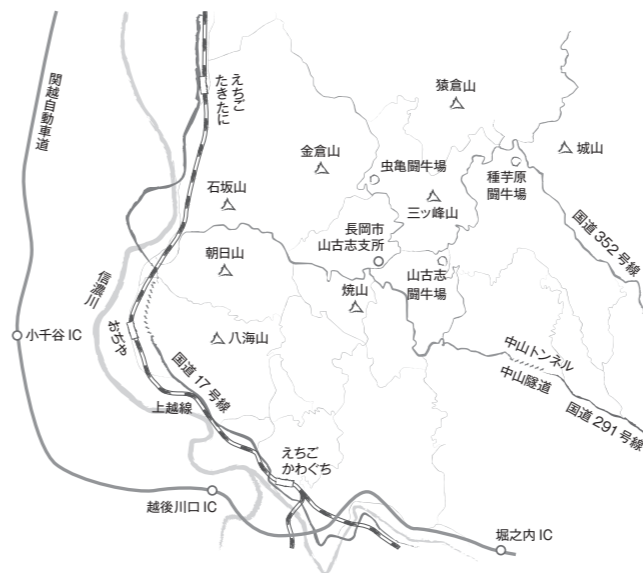
# 山古志の被災と復興の現場で

【新潟県長岡市】

新潟県中越地震で被災した旧山古志村。

その復興を支えたのは、人びとの土地への愛着と、おおらかさと、自立心だった。平成大津波を期に考えるべきテーマがここにあるのではないか。

文——篠原修 Osamu Shinohara  
絵——佐々木悟郎 Goro Sasaki



## 平成大津波と中越地震

平成大津波（いわゆる東日本大震災。しかし地元ではこの言い方ではピンとこないのだという。明治、昭和の大津波の呼称に習いたいのであろう）の被災地、陸前高田や釜石、大槌の現地を歩いているうちに、二〇〇四年十月二十三日に発生した新潟県中越地震により甚大な被害を受けた旧山古志村（二〇〇五年に長岡市に編入合併）を訪ねたことを思い出していた。

二〇〇六年の十月に被災状況を見に一度、二〇〇八年の十月と十一月にも、ほぼ復興なった山古志を訪れている。地震の被害は全山、全村に及んでいた。もともと地滑り地帯である山古志では、何か刺激があれば容易に土地は滑る。山腹に拓かれた棚田はすべて崩壊し、いたるところで崖崩れが山を裸にしていた。見渡す限り、風景は白茶け、赤茶けていた。谷筋に目をやると、土砂崩れで川は堰き止められて土砂ダムとなり、川沿いにあった家屋が辛うじて屋根のみを現しているのだった。

被災後の仮設住宅で暮らす人びとのテレビ映像は、今も鮮明に憶えている。年末年始の雪の舞うなか、壁の薄い仮設住宅での生活。さぞか



誰にも頼らずに住民自らが掘り抜いた中山隧道。自分たちの生活は自らが切り拓くという記念碑。日本にもこういう精神が存在していたのである。旧山古志村と旧広神村をつなぐ幅員1.4m長さ875mのトンネルで、昭和8（1933）年から掘り始められ昭和24（1949）年に貫通。平成10（1998）年に併走する中山トンネルに役割を引き継ぐまで、49年間村の暮らしを支えた。

## 暮らしの風景



し寒かろうとテレビに見入っていた。

### 自立心がトンネルを掘る

最初に訪れてから二年余り後、復興は概成し、山古志は様変わりしていた。

赤茶けていた山肌はアンカー付きのコンクリートでしっかりと固められ、山は灰色に輝いていた。川もコンクリートで固められ、水はとうとうと流れ、いたるところで砂防ダムがその流れを堰き止めていた。そして立派な道路が整備されようとしていたのだった。

この投資で一体何割の人が戻るのか。全体でいくらの公共事業費が投じられたのか。帰村ひとり当たり、それはいくらになるのだろうか。この投資を新しい集落に振り向けた方が安上がりで安全ではないのか、この災害常習地帯に投ずるよりも。これが当時現場で生じたふたつの疑問だった。

五割という僕の勝手な予想に反し、村民の帰村は七割に登ったという（今現在ではどうなっているのか、それは知らない）。理由はいくつかある。

錦鯉で稼げること、これが大きい。この生業は他の土地ではできないのである。そしてほぼ全員が地震保険に入っていたこと。そのお陰で自宅の再建は可能だったのである。さらに、山

村特有の地面と密着した感覚。「町で（長岡など）ウロついていると、不審な目で見られちゃってさ、山古志ならみんな自分の庭みたいなものだから誰も何にも言わないんだよ」「最後は自分の庭でね」。現場で住民に聞いた話である。

そしてさらに、マスコミが報道しなかった決定的なポイント。山古志は江戸時代以来の天領だったこと。昔から山古志は長岡藩に抑えつけられることなく、のびのびと、悪く言えば勝手にやってきた土地柄なのだという。錦鯉をやって儲け、鬪牛にうつつを抜かす、そういう自立心の高い土地だったのである。ここは豪雪地帯ゆえに冬には陸の孤島となる。そのハンデを克服するために村民自らが掘ったのだというトンネルを見せてもらった。そういう人びとなのである。

### 人の暮らしを支えるものは

かつての、つまり、お上の事業などを当てにできない時代であつたら、住民は被災にどう対処していたのだろうかと考えた。食わなければやっていけないから、生業の復旧が第一であろう。田圃と畑、錦鯉。それが一段落したら住宅の再建、それも水と食糧の確保と、燃料が優先したはずである。そして次に人の通れる交通路。こういう順序が、お上に頼らずにやる場合には、

復旧、復興の道筋だったはずである。

この手順は今どうなっているか。周知の通り、官が強いわが国では道路の復旧が優先し、それに続いて防災施設となる。私の生業は後回しの最後となっている。これは人間が生き続けるという基本からいうとおかしくはないか。

この逆転は今回の平成大津波でも続いている。まずは漁業、農業の生計の目処を立てることが先で、それこそが住民の生活と安心につながるはずなのだと思う。彼らは、実は三陸に限らず、漁民は、と言った方がよいが、家よりも船であり、養殖筏なのである。この事情は水産物加工場で働く人びとや工業製品の工場で働くサラリーマンとて同じであろう。

お上の公共事業のやり方にも問題は多い。一例をあげるなら十数層にもなる高さの防潮堤を百年以上にも渡って誰が維持管理するのか。施設はお上がつくってくれたのだから、管理もお上が、となれば、それは自分たちのものではなく、愛着も湧かぬであろう。せつかく定着し始めた、地方の自治意識をも逆戻りさせることになりかねない。地方の自主、自立精神を育てること。それが今回の平成大津波を機に考えるべき、二十一世紀のテーマではなからうか。

しのはら・おさむ●一九四五年生まれ。一九七一年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。アーバンインダストリー、東京大学理学部助手、同社会基盤学科教授、政策大学院教授などを経て、現在GSデザイン会議代表、土木設計家。



土砂崩れによってできた人造湖に埋まった家屋。山古志の被災を象徴する風景であった。